

作者不明

『皇帝ヨーゼフはやはり愛されている。最近世に出た著作『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』に対するちょっとした返答』 ウィーン、1787年。¹⁾

訳者 上村 敏郎

【解題】

1780年代のウィーンは、啓蒙君主ヨーゼフ2世の統治の下で検閲が緩和され、多くの出版物が刊行された。ここに訳出したパンフレットもその中の1つであり、『獨協大学ドイツ学研究』68号に掲載したパンフレット『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』²⁾に対する反論として匿名で1787年にウィーンで出版されたものである。著者は確かな証拠に基づいた形では明らかになっていない。ヨーゼフ期の散文文学を研究したボディは、『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』の作者ヨーゼフ・リヒターがヨーゼフを賛美した『皇帝ヨーゼフの祈祷書』を同じ年に出版したことを指摘した上で、このバ

1) Anonym, *Kaiser Joseph wird doch geliebt. Ein[sic] kleine Antwort auf die kürzlich erschienene Schrift: Warum wird Kaiser Joseph von seinem Volke nicht geliebt?* (Wien 1787). 本書原文はGoogleブックスの中で確認できる。<https://books.google.co.jp/books?id=TqAAAAAAcAAJ> 以下、本文中では『やはり愛されている!』と略す。

2) ヨーゼフ・リヒター『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』(上村敏郎訳)『獨協大学ドイツ学研究』68号(2014)、209-227頁。

ンフレットの作者がリヒターである可能性を示唆する³⁾。両パンフレットに関しては文体上の類似も指摘されている⁴⁾が、作者を同定するほどの史料の根拠があるわけではない。ある同時代文献は、このパンフレットが書籍商ルカス・ホーエンライトナー⁵⁾のところで販売されていたと述べている⁶⁾。出所の曖昧さには問題があるが、数ある反論パンフレットの中で最も早く出版され、最も多く流通したという点で『やはり愛されている!』は重要なものである。

『やはり愛されている!』は典型的な反論パンフレットであり、『愛されないのか?』の一文一文にコメントを付け加える形でそこで提示された「皇帝ヨーゼフは民に愛されていない」という主張を完全に否定している。ただし、リヒターが挙げた皇帝の業績に関しては同意している。『愛されないのか?』の第三部「高貴なる精神の持ち主」の望みに関しては、それを批判するだけでなく、一部の論点に関しては同意している。こうしたことから単純な批判文書でもないように思える。「これはいまや民の中の高貴なる精神の持ち主が提案する和平提案である。これが満たされるならば、善良な皇帝は不満分子の心を

3) Leslie Bodi, *Tauwetter in Wien. Zur Prosa der österreichischen Aufklärung*, 2te, verbesserte und erweiterte Auflage. (Wien 2000), S. 367. ヨーゼフ期の啓蒙文学について博士論文を執筆したイサーク・シャットナーやマリアンネ・ルンツァーもリヒターが著者である可能性を示唆している。Isak Schattner, *Die Josephinische Aufklärungsliteratur*, Dissertation (Wien 1925), S. 132. Marianne Lunzer, *Josephinisches und antijosephinisches Schrifttum*, in: Erich Zöllner (Hrsg.), *Öffentliche Meinung in der Geschichte Österreichs*. (Wien 1979) 53–63, hier S. 62.

4) Eduard Beutner, *Joseph II. Die Geschichte seiner Mythisierung und Entmythisierung in der Literatur (1741-1848) Die Grundlagen und Bausteine der josephinische Legende*, Habilitationsschrift (Salzburg 1992), S. 171.

5) Lukas Hohenleithner (1747-1796)

ヨーゼフ期のパンフレットを扱った書籍商の一人。アウグスティン・ガストル (Augustin Gastl) の姉妹と結婚し、1778年にアウグスティンの死後、その書籍業を引き継いだ。フランツ・クサーヴァー・フーバーの風刺小説『太陽のように明白なコメント』(Sonnenklarer Komenttar [...] 1788)などを委託販売する傍ら、ヨーゼフ・リヒターが編集した数多くの道徳週刊誌を発行した。Peter R. Frank, Johannes Frimmel, *Buchwesen in Wien 1750-1850. Kommentiertes Verzeichnis der Buchdrucker, Buchbändler und Verleger*, (Wiesbaden 2008), S. 86–87.

6) Anonym, *Briefe über den gegenwärtigen Zustand der Litteratur und des Buchhandels in Oesterreich*. (o. O. 1788), S. 212.

再びつかむのだ」という文末近くの文章を読むかぎり、結局のところ、『愛されないのか?』同様に、この反論文書も読者だけでなく皇帝に向けられたある種の政策立案パンフレットであったといえよう。そう考えるならば、この著者はリヒターの提案を改善しようとしていたとも考えられる⁷⁾。こうした反論パンフレットの存在は、1787年の時点のウィーン（あるいはこうしたパンフレットの流通圏）で政治について出版物上で議論する政治的公共圏が発展してきたことを示唆するものである。

翻訳については、『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか?』と同様には原則として Nation は国民、Volk は民、Unterthan [Untertan] は臣民と訳しわけている。『やはり愛されている!』には脚注はついていないが、訳者がわかりにくいと考えた箇所には適宜脚注および [] で訳注をつけている。誤訳などについては、ご指摘いただければありがたい。

7) 『やはり愛されている!』もリヒターが作者だと予想するルンツァーは、リヒター自身が予期せぬ影響力に恐れをなしてその力を弱めようとして書かれたものではないかと推測している。Lunzer, S. 62.

【翻訳：作者不明『皇帝ヨーゼフはやはり愛されている。最近世に出た著作『なぜ皇帝ヨーゼフは民に愛されるのか？』に対するちょっとした返答』】

ファエドルス⁸⁾ (Phädrus) に出てくる猫のように家族を仲たがいさせることを本当に楽しむ人々がいる。こうした人々は、他人を不愉快にできるものならなんでも拾い集めては見せびらかし、それで家庭内の協調や素晴らしい調和を乱すと、嘲笑的に喜ぶ。

それと全く同様に、領邦君主が民を愛し、そのことで民から愛し返され、尊敬されると、さもそれが目の上のたんこぶであるかのように嫌悪の念を顔に浮かべる人々もいる。彼らはそれゆえにこの相互の信頼を破壊し、両者の間に不信感を芽生えさせようと、どんどん協調的な結束、つまり民と君主の間不可欠である愛の絆から人々を遠ざけようとしている。オーストリアでは、それが自分たちを育み暖めていることにしかるべき礼を述べるために、このような憎まれ仕事を引き受ける人々に事欠かない。そして、このような階層の人々に最近世に出た著作『何故皇帝ヨーゼフは民に愛されないのか？』の著者も含まれるように思える。

こんな侮辱的なことや厚かましいこと、私はすぐには思いつかなかった。君主に対する侮辱であるとか民に対する侮辱であるとか。そんなことを両者に面と向かって言うのは極めて恥知らずなことのようには思える。

けれども、オーストリアの民を非常に侮辱している著作の執筆者がどの程度正しいのか、少々調べてみようか？ その著書が民に責任転嫁するための仮面をかぶり、君主に対してあえて意地悪く攻撃していることをどの読者もまもなく理解するだろうけど。

著者は序文においてすぐにこう言っている。「民は皇帝を愛していない、極

8) ガイウス・ユリウス・ファエドルス。1世紀に活躍したローマの寓話詩人。多くの動物寓話を残した。

めて賢明な布告に対する過小評価はどうしてなのか？」皇帝の繰り出す様々な命令は満足を与えておらず、それについて不満がでてきており、様々な点において皇帝が昔の状態を維持してくれることが期待されていると、私は正直に告白したい。しかし、このことから民が皇帝を愛していないという結果を導き出していいのだろうか。この問題は、親が自分の思い通りにならないと、いつも子供がしかめっ面をして、とても不機嫌になって下男に向かって不満を漏らし、両親の厳格さについて文句を言うという理由で、子供は両親を愛していないのだと結論づけて私が子供をしかろうとするのと、まさに同じことではないか。それは行儀のよくないことである。しかし、このことから子供が両親を愛していないと結論づけることはできない。それと同様に民の中の一部の無駄話や戯言から民が皇帝を愛していないと結論づけることはできない。皇帝は民の好きなものを攻撃し、民が長年慣れ親しんだものや十分に教えられないままそれが宗教の本質的な部分に属するものだと信じていたものを禁止した。それは群衆を皇帝に極めて危険な感じで引き合わせた。そのような状況でなければ、優しい息子が君たちに腹を立てる素振りを示したのだろうか？ 民が無関心でいられたのだとすれば、驚くべきことだっただろう。しかし、初めての逆上で腹を立てることと愛さないことは、互いに天と地ほど離れているのだ。愛しながらも、布告を好ましく思わないこともできる。

著者は続ける。「彼〔ヨーゼフ〕が危険に満ちた旅を行なっても、それに対する無関心はどうしてなのか、幸運にも自分の民の下に帰還したときに見せる冷淡さはどうしてなのか？」

ここで著者がどのような種類の民を目にしているのか、私にはわからない。しかし、皇帝が旅から帰還したときにはいつも人々の顔には温かい喜びが見えたのを私は知っている。互いに顔を合わせたときの最初の言葉は次のようなものだ。皇帝がそこにいますよ、皇帝を見ましたか？ もちろん、照明は灯されることなく、偉大な詩が地図帳に印刷され、手渡される。しかし、陽気な心、どの目からも（特に平民の間では）笑いがこぼれるほどの喜び、絶え間ないおしゃべり例えば皇帝がまたそこにいるとかいった話、そういったものが照明よ

りもはるかに多いというのに、まさかそれが民の無関心について示していたはずはないだろう？ しかし、どの人もそう考えているわけではないということをお私に付け加えておきたい。どこにでも人間のくずはいるのだ。しかし、親愛なる作者よ、あなたはまさにこのような例外を通例とし、(私のこれで気を悪くしないでください、) 論理に強力な平手打ちを食らわせているのだ。

あなたは次にこう言う。「君主を愛している民は彼に対する誹謗文書を狂ったように買いあさり、流布させるのだろうか、あるいは著作者を軽蔑する代わりに拍手喝さいで迎えるのだろうか？」

誹謗文書の読書に関して、あなたは私に次のことを認めるだろう。賞賛に値する人々の弱点が晒され、ひょっとするとかなり増大していると思いたくても、このことは決して墮落した人間性の欠点ではない。また、このような場合ではオーストリア国民が残りの世界の諸民族よりも完全な存在で利口であるわけではないということをお私はあなたの意見に付け加えたい。

しかし、拍手喝さいで迎えることに関しては、あなたがそう思いたいだけである。どれほどの軽蔑でみなが『セーケイとその刑罰に関する率直な覚書⁹⁾』について話し、頻繁にその覚書を読んでいたことか。『ベルリンからの手紙¹⁰⁾』に関しては、その素晴らしい様式に対して特に賛成をしたのだ。そしてこのことを差し引いても、この作品は誠実であり、それに続くいくつかの別の作品ほど侮辱的でもない。『シュレンドリアン氏¹¹⁾』について述べたいとは全く思わない。というのは彼が立法者よりもむしろ本当は法典の執筆者を攻撃しているからだ。そして、彼は拍手ではなく、嘲笑を受けている。それは皇帝に対する愛がほとんどないことからのものではなく、国民が一般的に諷刺を好むからである。

あなたの言う「ヨーゼフが民に愛されていないという証明済みの真実」はそ

9) ハンガリー近衛隊中佐ラディスラウス・セーケイ伯爵の横領事件と彼に下された禁固刑についてのパンフレット。皇帝の司法介入に対する強烈な批判を含んでいた。

10) 1784年から1785年にかけてウィーンを席卷したパンフレット。数多くの論争を巻き起こした。

11) ヨーゼフ2世の刑法典を批判したフランツ・クサーヴァー・フーバーの風刺小説。

の全てによっておそらく証明不能でありつづけ、あなた自身の意識の中にしか存在しない。

皇帝が民の愛を得る状態にいなかったということを今我々に証明して見せてください。

「ヨーゼフはまだ偉大な母親の存命中に国家を旅して回り、物価上昇をうまく処理し、外国の中の強国と同盟を結んだ。けれども、民は彼を愛さない」。

私はこれに反して次のように思う。民はあの時だけでなく今でもなおそのことでヨーゼフをたたえている。確かに今はもう以前ほど強くはないが、それは人間というものが過ぎ去った慈善行為については現在おこなわれているものと比べて次第に思い出せなくなるからである。いったい人間の弱点とは何だろうか。きっと個々の国民のせいにはできないだろう。慈善行為が頻繁に立て続けにやってくると確かに感じられはするが、その感じた気持ちを表現することははるかに弱くなることが認められるだろう。言うなればそのことに慣れてしまうのだ。

「言論の自由」は国民が皇帝に感謝を捧げ、皇帝をたたえるためのものである。しかし、国民がそれを行使したいと思っているほどにはおこなわないことを、親愛なる人よ、あなたはおそらくご存じだろうし、多くの人がこの贈り物の価値を理解できないのは、多くの人が勝手に行なった悪用のせいであることも知っているだろう。国民は出版の自由を獲得した際に、国民に有用なことを教えるためにその自由が使われるだろうと考えていた。しかし、「出版の自由が」使用されたのは、全世界の前で国民を嘲笑することに対してであった。今やそれどころか、国民が皇帝を愛さない恩知らずな民であることを国民に面と向かって言うために、踏み出そうとしている。いうまでもなく、贈り物がそのように用いられるなら、その全ての価値をほとんど失うことになるだろう。

「体僕制」の廃止に対して重苦しい軛を感じていた人なら誰でも彼に感謝するだろう。貴族が彼にそのことを感謝しないことはまあ自明のことである。というのは損失に対して感謝する人はまれであるし、私心を捨てることは非常に

難しい徳であるからだ。しかしそのことからこのような人々が彼の敵になったと結論を引き出すことは極めて誤りであり、侮辱的なことである。

けれども、私にはあなたのパンフレットの第1部全てを繰り返す必要がある。我々は皇帝が我々のためにやったことを知り、感謝する。そして、そう、確かに最も高貴なる最終目標からではないだろうが、あなたが我々に突然そのことを思い出させたという点で、我々はあなたと繋がっている。

しかし、私はあなたに多くの「にもかかわらず民は彼を愛さない」について一つ尋ねたい。一体何故、あなたの意見によれば全く君主の慈善行為をわかっていないこのような民が彼を愛さないだけでなく、敵にまでならないといけないのか、また一体何故、何か悪弊が生じたら民は「もし皇帝がそれを知っていたら」と話すのか？ 一体何故、彼の居ない所で起きた不幸な事件において例えば洪水の際にいつも「もし皇帝がここに居てくれたら」と叫ぶのか？ 一体何故、彼が外出したら、彼を見るためにみなが急ぎ、彼を既に千回見たと見なすのか？ 一体何故、心をしめる個人的に大事な用件と同じように心からの喜びで「私は今日皇帝を見た」と語るのか？ 一体何故ほとんどどの家でも彼の肖像に遭遇するのか？ 一体何故多くの子供たちが彼の名前を取って名付けられるのか？

君主を愛さない民にあらゆる特徴があるとすると、おそらく私は君主を愛する民の特徴を知ることが渴望するだろう。——おお、汝善良なるオーストリアよ！ なんと親切なことに汝自身を利用して汝を分裂させることに努めているのか！

私は二番目の問題「一体何故民は皇帝を愛さないのか」に移ることにする。

「彼は修道士や修道女を廃止し、司祭のかんりの収入を削減し、暇な聖職者に研究や仕事、実践的なキリスト教の信仰を促した。それによって、多くの司祭はヨーゼフの敵になり、彼らと共に司祭に共感し、司祭に同調する民も敵となった」。

宗教事項における皇帝の布告が多くの修道士、修道女、司祭やその支持者にとってほとんど、全く気に入るところでなかったことを私は告白する。また、

供物やそれ以外の様々な手間賃を逃したので、彼らが激しく不平を鳴らし、肩をすくめたことを更に認めよう。けれどもそのことからこのような人々が皆、彼の敵になったと導き出せるのか？ 付け加えることができる最大の事、それはすなわち、全ての関係者それぞれどこか民全体に関してこのように主張することは、若干は当てはまるにせよ、明らかに不当であるということである。なにしろあなたはオーストリア国民を驚くほど愚かだと思っているのに違いない。皇帝が彼らの愛すべき対象の一つを攻撃するという理由で、彼らが領邦君主の敵にさえなってしまうほど、皇帝が彼らのために行なったあらゆる残りの善行についても忘れてしまうというふうに。かなり強大な民に対して、「おまえたちが領主の敵である」と言うことは、物凄く厚かましいことである。

一体この聖職者に関する布告を国民がどのように評価しているか、それだけをもう一度問うてみてください。そうすればわかることだろう。大部分の人々、司祭自身そして修道士たちでさえもそれ自体をだんだん理解し始めていることを。「皇帝は本当に正しくよいことをした」という言葉を1,000回ほど聞くことだろう。そして、啓蒙化された司祭が民にいかんどういった布告が必要であるかを教え続けるなら、私が思うに、あちこちでまだ国民の目を覆っている鱗はまもなくなくなっていくだろう。かなりの廃止された慈善事業や兄弟団、宮廷服を脱がされかつらを取られてしまった立像を経て、たとえあちこちで年を取ったおばあさんのうち相当数の人が天国への眼差しを正反対に変えてしまうとしても、それに対して、本当に信心深い人々は、なおもかなりの紳士が好ましく感じるよりもどんどん多くなっており、彼らがそのことを神に感謝し、たたえるのをあなたは聞くことになるだろう。そして、もし、自分が何によって立ち、また立つべきなのかを知らず、小麦を雑草全体と一緒に引き抜くことによって、民を無知へと突き落とす人がそれほど多くなく、その結果、民が、自分たちの資格のない教師のように、何かを信じるべきかあるいはまったく何も信じるべきでないかをわからないのであれば、事態はおそらく既に大幅に先に進んでいただろう。

「皇帝ヨーゼフは貴族の力を制限し、それによって、貴族の大部分はヨーゼフ

フの敵となり、彼らと共に貴族自体よりも頻繁に臣民を苦しめ、支配していた秘書事務官、近習、管理者、検査官、穀物倉庫の管理人、そして事務員などの後衛も敵となった」。

このような人々の間で極めて多くの人が望んだことは古来の状態を維持することであると再び付け加えたい。というのは、誰だって自らの特権にまつわる物を失いたくないからである。それゆえに貴族が別の側面では自らに多くの利益を与えてくれる皇帝の敵になったのだと言うならば、そういった人々には極めて恥ずべき利己心しか望めないにちがいない。貴族が臣民に対する体僕制とそれによる様々な利益を失ったとするならば、彼には自らの所有地の状態を更に改善し、自らの生産物を更に有効に人々にもたらすことに対しての眺望が開かれたのである。彼の工場は簡単に売れ行きを維持し、司法手続きの加速によってかつて法律家や弁護士がむさぼっていたいくらかのお金を財布にためることになるだろう。被っている損害を見つめるなら、流れくる利益も顧みるべきなのだ。

「皇帝ヨーゼフは高額な給料でそれほど働いていなかった官吏たちに義務を課した。それによって、彼らはヨーゼフの敵となり、彼らと共に彼らの多くの支持者も敵となった」。そうしたすべての敵愾心は、私が思うに、惨めな嘆きにすぎないのであって、あなたは単なる小さな丘をアルプスと夢見ているのだろう。私は信じる、そう確信している、皇帝の実施した制度全てを再び一つ残らず廃止すべきかどうか、どの官吏に尋ねても、おそらく100人中1人もそうですねと答えることはないと言いきれる。なぜなら、官吏は自らが一方で失ったものを他方で獲得しているからである。

「商人の大部分は闇取引によって生計を立てていた。外国製品の禁止はしたがって彼らから非常に優れた生計手段を遮断し、彼らに合法的な手段を考え出すように命じた。それによって彼らと商品の検査員、商店の奉公人などは皇帝の敵となった」。

我らが商人への可愛いお世辞。けれども、私はそれが真実であると受け入れたい。このことから本当にこの不満を抱いている人たちが敵になると結論付け

られるのか？そして、彼らが目先の利益が無いのを寂しく思うという理由で、将来の遥かに大きな利益に対して盲目的であるにちがいないと結論付けられるのか？しかし、私は公正でありたい。私はあなたに闇商人を贈ろう。我々は今や一度法を犯しているのだから、私はあなたにタバコと塩の密輸入、そして残りのならず者全てを贈ろう。尊敬すべき軍団を完全なものにするために。自分たちの念入りな思惑が邪魔されるなら、詐欺を働くものたちは確かに好んでそんなものを見たいとは思わない。

「皇帝ヨーゼフはもはや独占的自由を与えなかった。それによって、独占的に商売したい多くの工場経営者はヨーゼフの敵となった」。

この文には全く文句をつけるつもりはない。この文をこじつけて引き合いに出すことがあなたにとってどんなに苦々しいものになったかそこからわかる。私を驚かせたことには、あなたがそこに薬屋やカフェハウスの主人のことを入れたがらなかったことだ。

「皇帝ヨーゼフは司法に比較的足早な歩みを与え、法を改善し、裁判官の手数料をカットした。それによってかなりの数の裁判官や弁護士は彼の敵となった」。

裁判官や弁護士がまだ完全な手数料を保持しているのなら、彼らはそれを見たがることだろう。おお！私は次のようなことを付け加えておきたいと思う。彼らは削減自体についてひそかに溜息をついている。しかし、既に言ってきたように、溜息と敵意の間には天と地ほどの違いがあるのだ。そして、この種の溜息をついたり、唸り声を挙げている人々のうちかなりの人々が自分たちの皇帝のためにすべて喜んで着手すると確信している。そして敵がこれを行なうなら、思うに、そのことにはかなり満足できるだろう。

しかし、一瞥で見渡してみると、一体どこに恐るべき皇帝の敵の軍隊が存在するのだろうか。

最大の会戦が民全体を聖職者様の総司令部の下で編成する。

右翼には秘書事務官、近習、管理人、検査官、穀物倉庫の管理人や事務員を伴う貴族がいる。更に官吏やその婦人、叔母、愛人、従僕、そして侍女もい

る。

左翼を裁判官、弁護士、弁護助手、書記、写記生、実習生が独占的商売を望む工場経営者と一緒に編成する。

軽装部隊には闇商人、商品検査員、商店従業員や食事友達が徴集される。

その結果、医者が民に含まれていないとすれば、皇帝には彼らの他に何者も残っていない。

そこに戦闘準備を整えている恐るべき軍隊はもう存在するのだ。しかし、我慢だ！——おそらくはフランスに名望家がようやく集まってきたから、このような事態は小冊子に現れ、民の中の高貴なる精神の持ち主が登場するのだ。そして彼らの語り手、著者を通して、民の中の高貴なる精神の持ち主は第三部で自らの望みを説明する。これは今やこの本の最終目標そのものであり、この前の部分は単に今ここにつなげるものをしかるべき方法で言うことができるように、言ったに過ぎないのだ。

けれども、この18の望みが何を主張しているのか見てみよう。

1. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む、皇帝が年金を考慮して変更を加え、ただ単に勤務年数の数だけを見ないことを。

この望みに関して今やほとんど反論は持ち出されないだろう。しかし、それだけ一層そこから導き出される結論に対して反論は出るのだ。すなわちかなりの官僚がこの規定によって結婚を妨げられており、人口が失われているという結論に対して。

まったく年金を望めず、はるかに少ない給与をもらっている他の領邦の人々が妻子を養っている一方で、とてもすばらしい給与を得ている働き盛りの人々が非常に多く独身生活を続けているのを見ている間は、決してこの年金規定が独身や人口増加の妨げに責任があるとは納得できない。わが国の独身男性の結婚しない理由全体の中で年金規定が末席に相応しいのは確かである。

2. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む、皇帝が大臣や顧問官を召使のようにではなく友人のように扱うことを。

大臣や顧問官、そして彼らの扱われ方を全く知らないのです、この点に関して

は判断できない。しかし、全身〔全軍〕が命令されるだけの手足〔部隊〕から成り立っているのに対し、文民階層が自由意志から成り立っているからといって、厳格さが単に軍隊にしか必要ないと付け加えるのは不可能である。賢明な厳格さはどの身分にも必要である。将校は文民官僚と同じく命令されるだけの召使ではない。しかしもし将校に十分な厳格さが無くなってしまえば、軍隊は間もなく、カタツムリに喩えられることがめずらしくない文民階層と同じようになってしまふだろう。勤務に対する愛を持つ者は厳格さを恐れる必要はない。そういった人は情熱に駆られて仕事にあたり、迅速に終えることだろう。そして賢明な厳格さであることが前提であるなら、厳格さが勤務に対する愛のない者の損になることはない。賢明な厳格さでなければ、勤務に対する愛のない者は常にうちひしがれ、仕事は完全にはかどらなくなる。

3. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝が新しい入院患者の施設のために他の施設を廃止しないで欲しいと。というのは、設立者自身は生活費だけでなく収容された人々の快適さ、安寧や満足度にも注意を向けていただろうが、今やその意図も失われたからである。

このような施設が廃止されないとするならば、一体どこから総合病院、軍人病院、助産院、孤児院そして精神病院のための基金が来るのだろうか？ 新税徴収がなされるべきなのだろうか？ 私はそうした噂に耳を傾けたかった。宗教基金は、以前十分に支出しているのだから、なにも捻出できない。どんなにそのような古い施設を尊敬していたとしても、どんなに慈善施設の設立者の思い出を評価していても、私は公平に告白しなければならない。この新しい施設のほうが有用であると。公安こそ最高の法なり (*salus publica suprema lex esto*) はすでに有名な言葉であり、さらに、古い施設を享受していた人びとが扶助されなかったわけではない。このことが公安 (*salus publica*) 全体において極めて不公平なものであり、それどころか極めて不適切なものであったのだろうか。

このような施設の廃止によって皇帝が人類の不利益となるように臣民の今後の慈善活動を制限していたというのは、単なる一文というよりも虚しい文である。真の慈善家は、自分の意志が忠実に守られつづけるなら、確かにそのこと

をますます好ましく思うだろう。しかし、たとえ本当にその慈善施設が当初の設立目的のために今後使われないと知っていたとしても、本当にその慈善施設が慈善活動への利用のために使われることさえ知っていたなら、真の慈善家は慈善施設を作ることを邪魔させないだろう。慈善行為は彼の意図である。彼が慈善行為をどのような方法でおこなおうとも、ほとんど動揺することはないだろう。私は民の高貴なる精神の持ち主がすぐにこの慈善施設への意欲が消えていないという例を与えてくれることの他にもはや何も望まない。

4. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝ヨーゼフが文民を軍隊と同様に愛し、軍人に文民職をそれ程多く与えないことを。

著者は全く軍隊の友人ではないようだ。[軍服の] 白い上着は機会があるたびに側面から斬りかかられている。皇帝が文民より軍隊を愛しているかどうか、私には決めることはできないし、文民職を軍人に与えることについても私は評価できない。なぜならそのことを十分に知らないから。

5. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。州都に住む官僚や市民の子弟が軍隊への召集から再び解放されることを。

これは各領邦の首都に住んでいる高貴なる精神の持ち主の望みであろう。私はむしろ、その他の身分でなんらかのりっぱな仕事に取り組む才能を示したものが、ここで素晴らしい成長や健全な姿を損なうことなしに、徴兵を免除されつづけることを望む。こういうことなしに17あるいは18歳前に兵士へ取られないので、このことは記憶に留めておくには全く難しくないだろう。しかしこれによって単に愚かな悪魔が軍隊へ取られればいいと言いたいわけではない。

多くの若者が兵士という職のために全く学ぶ必要はないと単に信じているせいだけで役立たずのままにいるのだと説明することはできない。というのも私は多くの子供たちをみてきたからである。その子達は相当な役立たずであったけれど、マスカット銃を担ぐという考えによって何かを学ぶことを妨げられることはなかったはずだ。

5. [6.] 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。自殺者が皮剥ぎ人の広場には埋められないことを。

私は民の高貴なる精神の持ち主の中にこの自殺者の埋葬方式に非常に満足している人はかなりいるだろうと思う。それはこのような屈辱的な埋葬方式が廃止されて以来、自殺者の数が大幅に増加したという経験によって証明される。これに反して、少なくとも私にわかることには、その再導入以来ここウィーンでわずかな自殺しか起きていない。どんな場所で腐敗していくのかなんてことは死者の身体にとってどうでもよいことであることはよくわかっている。しかしまたそのような些細な事情が十分納得のいく動機よりも人間に影響を及ぼすことが多いことも私は知っている。そして屈辱的な埋葬方式にまつわる多くの噂が私の意見が正しいことを証明している。

7. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。犯罪者が冷たい法文によって処理されずに、不幸な犯罪者に対しては邪悪な犯罪者よりも穏やかに振る舞い、あらゆる刑罰が改悔を目標とすることを。

民の中の高貴なる精神の持ち主はとてまたくさんのことを望んでいるので、彼らは最後にもはや何を望むべきかわからなくなっているのだ。犯罪者が法律によって裁かれるべきでないならば、われわれは法典を必要としない。そして立法者はどんな状況にも自分で決断しなければならないだろう。いかなる犯罪においても行為者の悪意の多寡が重要であるということを優れた刑法学が与えてくれるだろう。でも、どのみちこのことを刑法の初学者は知らない。だからおそらくこのような望みを民の高貴なる精神の持ち主は抱え込むことができるのだろう。

8. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。死体をもはや袋に縫いこみ、それからごちゃ混ぜに石灰の穴に投げ入れないことを。

民の中の高貴なる精神の持ち主は短期記憶しか持っていないに違いないだろう。というのも、そうでもなければ、彼らは2年も前にすでに満たされた望みをいまだに抱いて来たわけではないだろうからである。かつての不快な考えを再び呼び覚ますために、それが生じたわけでないのならば、これは別にそれほど高貴なことではないだろう。

この場所にわれわれの親類が眠っていると知ることが何らかの慰めになるこ

とを私は知っている。しかし、墓が都市から1時間半も離れており、多くの人々がそこに埋葬されている大都市の中では、どの家族も自分たちの特別な墓を指定することが簡単にできないことも理解しよう。そして私は民の中の高貴なる精神の持ち主が望んだように、墓地が再び都市の中心に据えられるといったことを望みたくない。

現在の埋葬方式に対する嫌悪感によって、騒動は多く、望みはわずかである。しかし私はその埋葬方式を首都ではなく小さな村で隷属的にまねることで、それが笑い話になることを望みたい。

9. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝が重大な犯罪者の刑罰においても生まれや地位を顧みることを。

許可を得て、このことを民の中の高貴なる精神の持ち主が望むことは不可能である。身分が高くなればなるほど、犯罪はますます目立つのであり、したがってその犯罪は普通の男と比べて、厳しくなくても、穏やかに罰する必要はない。特に、高い地位にある犯罪者は比較的よい教育を受けており、行動道徳について教わっていることを前提にすることができるのだから。

著者が主張しているように、聖職者の犯罪が密かに罰せられているわけは、主の司祭が公に懲らしめられるのを見れば、民が最終的に宗教自体に対して敬意を失ってしまうと恐れられているからではない。聖職者が勅令違反を犯せば、民の中の高貴なる精神の持ち主は、兵士を恥じ入らせることなく、将校を罷免した後、罰するのと同様に、聖職者身分やさらにいっそう宗教を恥じ入らせることなく、その聖職者を解職して、罰することを求めることだろう。かつてメンバーであったものが罰せられる時に、そのメンバーが属する団体にあまり恥をかかせないのと同じようなものである。

10. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝が官吏に給与を払うことで、彼らが借金を作らないことを。また、給与規定において官吏の家族を顧みることを。

この点について私は何も語るができない。なぜなら私には官吏の給料がわからないからである。私はまだマリア・テレジアの御代にある老齢官僚か

ら聞いたことを知っているだけである。皇帝の威厳ほど神の威厳に似つかわしいものはいない。誰も彼女と同じくらいよくは払わないし、ひどくは働かされない。

11. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。老齢あるいは仕事に役に立たなくなった官僚によりよい扶助が割り当てられることを。そしてまた、国家の奉仕者がお仕着せ奉公人のようにみなされないことを。

この望みは与えられている年金ですでに満たされていると思う。民の中の高貴なる精神の持ち主が退職でもって何を言いたいのか、私には理解できない。

12. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。官吏の過ちが本当に国家犯罪でないのなら決して免職でもって罰さないことを。

官僚が結果として自分のことを職務に不適切と示すような犯罪ならば、彼は正当かつ公正に罷免されるものだと思う。このような刑罰への恐れが彼を慎重にさせ、義務を遂行していく上で用心深くなる。しかし全体的に見たいからには、どの刑罰も判決や法に基づいて課されるのなら、私はこれをこのような刑罰においても期待する。

13. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。ヨーゼフの儉約が決して徳であることをやめてしまう境界線にまで行ってしまわないことを。

つまり、飾り気のない言葉でいえば、あなたは彼がけちにならないように望んでいるということだろう。しかし、この名望家はむやみに心配しているように思える。というのは、好調な経済からけちへというのはまださらに大きな飛躍であるからである。今年行なわれたガリツィアの貧しい臣民に対する穀物や穀物粉の配給によって、その恐怖は根拠のないものであるとさしあたり証明することができる。

14. 民の中の高貴なる精神の持主は更に望む。皇帝が貧民の数が日に日に増えることがどこから来るのか、ある種の指令や廃止に責任があり得ないかどうか、調査することを。

よそ者の流入がますます多くなっていると考えるなら、どのようにすればかつて多くの人々にパンを与えてきた仕事を機械を使って早めることができるの

か、誰もが思案を巡らせると考えるなら、また更に怠惰や耽溺がなおもほとんど流行病であると考えれば、このような問題はおそらくまもなく解決されるだろう。

15. 民の中の高貴なる精神の持ち主は望む。皇帝が決断の際に性急過ぎないことを。そして善行の効果が満たされるのをすぐに見たいという望みがそれを自ずと邪魔しないということ。

「急がば回れ」は確かに必要な素晴らしい目標である。その果実自体がわれわれに有害なものでないなら、果実に熟すまでの時間的余裕を与えなければならない。しかし、果実は熟しすぎてもいけない。この新しい法典は確かに完璧なものではないけれども、永続令¹²⁾(*Edicto perpetuo*) からわれわれの時代にいたるまで、説明や解説、制限や拡大そしてもっと正しい規定を付け加える必要のない法典をいまだに見たことがない。ここで完璧なものを望むことは無益である。

16. 高貴なる精神の持ち主は望む。彼が密告者に大いに喜んで耳を傾けないことを。

誤った密告はさらし台の恥辱や別の罰を結果としてもたらずので、名誉ある男性は密告者を今更恐れる必要はない。

17. 彼らは望む。彼が役所にまた署名されてない嘆願書について提案を上奏し、紹介することを許すことを。

この望みは私には正しいと思われる。

18. 最後に高貴なる精神の持ち主は望む。彼が芸術家や学者にもっと注意を払うことを。

これはそもそもドイツのミューズがドイツ諸侯にもう長く望んできたが、唯一音楽にしか応じられてこなかった望みである。

これはいまや民の中の高貴なる精神の持ち主が提案する和平提案である。これが満たされるならば、善良な皇帝は不満分子の心を再びつかむのだ。完全に

12) ハドリアヌス帝治世のローマの法務官サルウィウス・ユリアヌスが編纂した法律集。

敵対的な軍隊は銃を伸ばし、皇帝はアドラーブルクに入城し、民の中の高貴なる精神の持ち主は彼に後ろから次のような言葉を浴びせる。ヨーゼフの勝利だ！

このような様々な望みが満たされるならそれは大変快いものであるということは確かであるが、たとえそのすべてが満たされても、更になお不満分子が存在するというのもまた確かである。そして、それらが満たされようが、満たされまいが、我々が我々の善良な皇帝を愛しており、いつも愛していこうということはもっと確かなのだ。

著者が、民の中の弱者たちに怒りを与えないために、極めて賢明にも書き物机の中にその小さな本をしまいこむことになったことは間違いなしである。